H-3

変化内在関係節の再考察

澁谷 みどり
神戸松蔭女子学院大学 大学院

1　はじめに

本研究は，日本語の関係節のうち変化内在関係節 (Change Relatives; CR) と呼ばれる関係節を，構造は類似しているが異なる関係節とされる主要部内在関係節 (Head-Internal Relative Clause; HIRC) と対比させながら，統語構造と意味構造を分析し CR について理論的に説明することを目指す。

2　先行研究と問題点

2.1　主要部内在関係節と Change Relatives

Tonosaki (1998) においては，関係節直後に生起する「の」は pronominal であるとし，埋め込み節内の項の属性 (property) が意味的な変化をするという特徴があると分析する。

例えば (1) は，関係節内の動詞「沸かす」により内項の「ミネラルウオーター」が「湯」に変化し，主節の動詞の項として振る舞うのはこの「湯」である。関係節直後の「の」は，この解釈された項をうける nominal であり，「やつ」などの light noun と置き換えることが可能である。

(1)　CR:

a.　メアリーは [[ミネラルウォーター を 沸かしておいた] の] を 飲んだ。(cf. Tonosaki (1998, 152:(30a)))

b.　メアリーは [[ミネラルウォーター を 沸かしておいた] **やつ**] を 飲んだ。(cf. Tonosaki (1998, 152:(30b)))

一方，(2) では関係節内の動詞「買う」は，この動詞の項である「ミネラルウォーター」に意味的な変化を与えてはおらず，主節の動詞の項としても解釈は「ミネラルウオーター」のままであり，関係節直後の「の」は「やつ」などの light noun と置き換えることはできない。

(2)　HIRC:

a.　メアリーは [[ミネラルウォーター を 買っておいた] の] を 飲んだ。

b. *メアリーは [[ミネラルウォーター を 買っておいた] **やつ**] を 飲んだ。

2.2　問題点

(1) と (2) との対比で示した CR と HIRC の差異で際立つ点が 2 つある。1 つは関係節直後の「の」の範疇であり，今 1 つは関係節内の項の名詞句と「関係節＋の」があらわす指示物との関係である。つまり，CR と HIRC には (3) のような差異がある。

(3)　a.　関係節内の項の名詞句の意味が何らかの意味で変化すれば，関係節直後の「の」は nominal。

b.　関係節内の項の名詞句の意味が「関係節＋の」と同じであれば，「の」は補文辞。

(3) で示した差異から生じる疑問は，関係節直後の「の」と節内の意味とがなぜ相互に関係するのかという点である。この疑問点をあきらかにしていくうえで，関係節内の動詞や動詞句の意味についてより詳しく考察していく。

そこで，本研究では関係節内にあらわれる動詞の意味を語彙概念構造 (LCS)(Jackendoff, 1990) による形式的な表示であたえ，特に CR では BECOME 関数が存在する動詞が使われることを示す。また，生成語彙意味論の枠組み

(Pustejovsky, 1995; 影山, 2005; Hidaka, 2011) と VP shell 理論 (Larson, 1988) に Thetic and Categorical Judgment (cf. Kuroda (1992a), Ladusaw (1994)) の理論を取り入れ発展させた Basilico (1998) の考えを利用して，意味構造から CR と HIRC との統語的な違いを予測することを目標とする。

なお，「の」に関してはその範疇が多機能だと言われ議論となる要素ではあるが，多機能だという点に着目し，ここでは関係節のあらわす意味によりその機能が補文辞と nominal との間で変動すると考える。

3　方法論

3.1　Thetic and Categorical Alternations

Basilico (1998) が取り入れた Thetic/ Categorical judgments とは，哲学者 Brentano による考えであり，Kuroda (1992b) によって言語学に取り入れられている。thetic judgment とは個体の存在あるいは事象の実現をあらわしており，categorical judgment とは個体とその個体の属性について述べるという複合の形式であらわす (Ladusaw, 1994, 223)。Ladusaw (1994) は，2 つの judgment について次のように要約する。

(4)　Judgment structure

a. Basis for a thetic judgment: a description

b. Basis for a categorical judgment: an object and a property

c. A thetic judgment is an affirmation or denial of the description in the basis (Existential commitment)

d. A categorical judgment is an affirmation or denial of the basis property to the object in the basis. (Predication)

(Ladusaw, 1994, 224: (13))

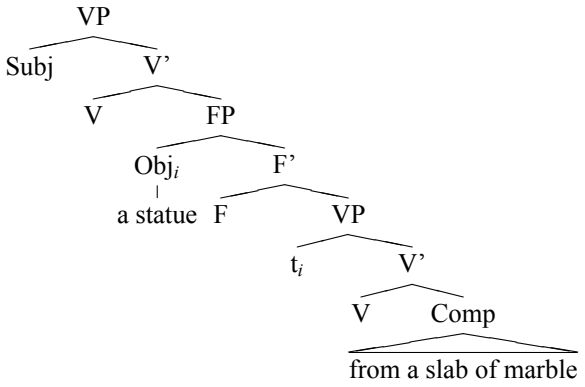
Basilico (1998) は，目的語は動詞とその補部により規定される内在述部 (inner predication) の内在主語であるとし，目的語の位置の違いが述部形式の違いと一致し，文レベルの *Thetic* と *Categorical* judgments との違いと同様であると分析する。例えば，Basilico (1998) の例文を基にした (5a) では VP の内項「a statue」は「像」の存在を直接あらわすと解釈するので下位 VP 内で基底し，上位と下位の VP との間とする層 (Functional Phrase; FP) の指定部へ移動し thetic predication となる。一方，(5b) は「a slab of marble」が形成するものが「a statue」であると解釈するので，目的語「a slab of marble」は FP の指定部に基底して外在し，categorical judgment となる分析をしている。

(5)　a. The sculptor carved a statue from a slab of marble.

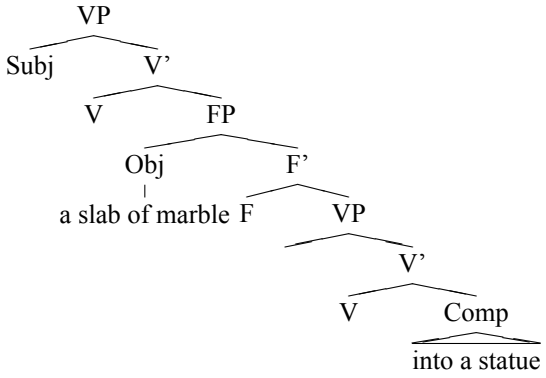
b. The sculptor carved a slab of marble into a statue.

つまり，上位と下位の VP の間に FP (Basilico は Transitivity Phrase としている) という層をあたえて，下位の VP の指定部の位置に基底する場合は thetic judgment に関わり，FP の指定部の位置に基底する目的語は categorical judgment に関わるのだと考えている。

(6)　Thetic Alternant



(7)　Categorical Alternant



さらに 2 つの構造の違いを動詞の概念構造を使い内在述部（下位 VP) の意味の違いに対応させ，Thetic and Categorical 交代を特徴づけるとし，この違いが項の位置と格の区別の基礎となると Basilico (1998) は述べている。

彼の考える概念構造を基本にすると，(5a) の内在述部は (8) のように表記し，「the statue」は BE の作用域にあり「像が大理石から出現した（存在）」という事象をあらわしており，「statue」に帰する属性をあらわしているわけではないとする。動詞「carve」と結合することで 1 つの事象をあらわし，ある特定の個体が存在するにいたることであり thetic presentation である。Basilico (1998) は内在述部の BE は事象自体を補部にとるとして $BE_{<event>}$ とラベルしている。

(8)　[[BECOME [[$BE_{<event>}$[[the statue], [FROM [marble]]]]]]]

一方，(5b) の場合は (9) のように表記し「statue」は目的語「the marble」に対し属性をあらわす働きをしており，内在述部は categorical の文を形成する。つまり「statue」は BE の補部と考え，内在主語の「the marble」と連結するが、「the marble」は BE の作用域の外側にあるとする。この BE は property を補部にとるとし $BE_{<property>}$ とラベルしている。

(9)　[[BECOME [[the marble] [$BE_{<property>}$[statue]]]]]

(8)，(9) から，Basilico (1998) は (5a) の目的語「a statue」は下位 VP の指定部に生成し，(5b) の目的語「(a slab of) marble」は FP の指定部に基底すると分析し統語構造と意味の違いを対応させている。この概念構造については同様の日本語の例を使い，Basilico の構造では表示できていない部分を Section 4 で詳しく述べる。

3.2　CR と HIRC の統語構造と意味表示システム

HIRC の関係節内の意味については，Hoshi (1995), Shimoyama (1999) の考えを発展させた Nishigauchi (2004) の次の主張のうち，関係節内の意味的特性について議論した (10b) を焦点に考えていく。

(10)　a. The semantic content of the HIRC induces E-type pronouns.
　　b. The semantic content of an HIRC constitutes a thetic judgment, as against the categorical judgment.

HIRC の存在含意という意味的特性と Basilico (1998) が利用した Thetic and Categorical Judgments の考えを取り入れ，Nishigauchi (2004) は日本語の HIRC の解釈と統語構造は thetic judgments の統語的実現であると主張する。thetic judgment では，動詞の項となる名詞句により存在の出現を断定する。HIRC では進行中をあらわす表現が容認されにくいのは，この thetic judgment が関わるからと考えられる。

(11)　a. [ケンが 家を 建てた の] に マリが ペンキを 塗った。
　　b. *[ケンが 家を 建てている の] に マリが ペンキを塗った。

そこで，CR は HIRC とは異なる振舞いをする点から thetic judgment ではなく categorical judgment が関わると仮定し，統語構造については Basilico (1998) の考えを取り入れて意味構造からの分析を試みる。

また，本研究で用いる動詞の意味構造については生成語彙意味論の枠組み (Pustejovsky, 1995; 影山, 2005; Hidaka, 2011) を利用した次のような意味表示を用いる。特質構造 (QUALIA) を真理条件的意味部門 (Truth-conditional Section=TS) と非真理条件的含意 (Non-truth-conditional Section=NTS) とに分ける方式は Hidaka (2011) に従う。

(12)
$$\begin{bmatrix} \text{ARG} = \begin{bmatrix}\text{統語構造における項}\end{bmatrix} \\ \text{QUALIA} = \begin{bmatrix} \text{TS} = \begin{bmatrix}\text{FORMAL: その動詞のイベンチュアリティ} \\ \text{CONST: 語彙概念構造 (LCS)}\end{bmatrix} \\ \text{NTS} = \begin{bmatrix}\text{TELIC: その動詞が持ち得る結果状態} \\ \text{AGENTIVE: その動詞が成立するための外的要因}\end{bmatrix}\end{bmatrix}\end{bmatrix}$$

4　議論

4.1　Existential Commitment

関係節内にあらわれる動詞が (13) のように存在をあらわす動詞や (2) の「買っていく」や (14) の「持ってくる」のように物理的な移動をあらわす動詞では HIRC としての解釈はなりたつが CR としては解釈できない。

(13)　太郎は [リンゴが 皿の上に あった { の/??の（=やつ）}] をとって食べた。

(14)　ケンが [リンゴを 持って来た { の/??の（= やつ）}] を 取り出して食べた。

次に thetic judgment が関わる動詞である「書く」や「現われる」を使って分析すると，(15a) では「論文」の存在を断定できる。(15b) では thetic judgment に関わるのは「論文」であるが主節の動詞との関係から HIRC での解釈は容認度が下がる。(16a) では，HIRC の節内の動詞の主格位置に名詞句があるが，動詞「現われる」により「学生が出現した」という thetic judgment になり主節の動詞の項としてもふるまう。「働く」では「学生がコンビニに存在する」という断定ができないので HIRC としての容認がかなり下がる。

(15)　HIRC

a.　[学生が シンタックスの論文を 書いた { の/ *の（=やつ）}] から 先生が 引用した。(Nishigauchi, 2004, 119: (29a))

b?*[学生が シンタックスの 論文を 書いた の] から メールを もらった。(Nishigauchi, 2004, 119: (29b))

(16)　HIRC

a.　[学生が パーティーに 現われた の] から メールを もらった。(Nishigauchi, 2004, 120:(30a))

b??[学生が コンビニで 働いた の] から メールを もらった。(Nishigauchi, 2004, 120:(30b))

しかし，「書き直す」という動詞では (17a) のとおり CR として解釈可能である。Tonosaki (1998) も「書き直す」を使った例文 (17b) を CR の例として提示している。また，「～ている」というような進行中をあらわす表現では (17c) のように CR では容認できる。動詞の持つ意味により，「論文を書いた」という前提が成り立つ categorical judgment が関わり，「～ている」がもつ影響を受けないと考えられる。一方，HIRC の (18) では「論文」が存在するという断定までには至らず HIRC の解釈はできない。

(17)　CR

a.　[[学生が シンタックスの論文を 書き直した] { の/ やつ }] から 先生が 引用した。(CR)

b.　[John が 論文を 書き直した] の] が LI に のった。(Tonosaki, 1998, 154: (33a))

c.　[[学生が シンタックスの論文を 書き直している] { の/ やつ }] から 先生が 引用した。

(18)　HIRC

*[学生が シンタックスの論文を 書いている の] から 先生が 引用した。(HIRC)

次の例でも「～ている」という表現について同様の分析ができ，HIRC では容認されない進行中をあらわす表現も CR では容認可能である。

(19)　CR

a. ?[[タロウが 部屋を 花で 飾り直した] の] から 一輪 もらった。

b. ?[[タロウが 部屋を 花で 飾り直している] の] から 一輪 もらった。

(20)　HIRC

a.　[タロウが 花を 部屋に 飾った の] から 一輪 もらった。(Nishigauchi, 2004, 124: (42))

b. *[タロウが 花を 部屋に 飾っている の] から 一輪 もらった。

c. *[タロウが 部屋を 花で 飾った の] から 一輪 もらった。(Nishigauchi, 2004, 124: (43))

4.1.1　Creation/ Transformation

次に (22) の「彫る」という動詞では，「仏像」のような名詞句を内項にとれば HIRC として解釈は可能であるが CR としては解釈できない。一方，関係節内の動詞の内項を「木」にすると (21) のように CR として解釈できる。

(21)　CR: ケンは [[木を 彫った] { の/ もの }] を お寺に寄進した。

(22)　HIRC: ケンは [仏像を 彫った { の/ *の（= もの）}] を お寺に寄進した。

(1) の「沸かす」も同様の分析が可能である。この場合も関係節内の動詞の内項が「水」の場合は categorical judgment がはたらき CR の解釈となるが，内項を「水」から「湯」にかえれば thetic judgment となり HIRC として解釈できる。

(23) CR: メアリーは [[水を 沸かした] の（= やつ）] を 急須に注いだ。

(24) HIRC: メアリーは [湯を 沸かした { の/??の（= もの）] を 急須に注いだ。

同様に関係節内の動詞の内項の名詞句のタイプにより CR，HIRC の解釈の違いがでると考えられるものに次のようなものがある。

(25) a. CR: ケンは [[土を 掘った] の] の中に 宝石を入れた。
b. HIRC: ケンは [穴を 掘った { の/ *の（= もの）}] の中に 宝石を入れた。

(26) a. CR: アイコは [[毛糸を 編んだ] の] を 畳んで ケースに入れた。
b. HIRC: アイコは [セーターを 編んだ { の/ *の（= もの）}] を 畳んで ケースに入れた。

(27) a. CR: アイコは [[生地を 縫った] の] を 試着した。
b. HIRC: アイコは [洋服を 縫った { の/ *の（= もの）}] を 試着した。

4.2 分析

まず，関係節内の動詞の内項の違いで CR か HIRC かに解釈が分かれる (21)，(22) から分析する。この 2 つの文で使われている「彫る」の基本的な意味構造は以下のように TS に ACT-ON 関数をもつ動詞である。「彫る」は「木」のような名詞句を項にとれるが，「1 時間（の間）/ 1 時間で」といった副詞表現との共起では容認度が分かれる。

(28) a. ?木を 1 時間で彫った。
b. 木を 1 時間（の間）彫った。

「木を彫る」の「彫る」は transformation であり「彫る $_t$」とする。結果状態を推測するような情報を語彙にもつが値については未定で，NTS に結果状態をあらわす情報構造をもつと考えられる。

(29) $$\begin{bmatrix} \text{彫る}_t \\ \text{ARG} = \begin{bmatrix} \text{ARG1: } x, \text{ ARG2: } y, \text{ D-ARG1: } z \end{bmatrix} \\ \text{QUALIA} = \begin{bmatrix} \text{TS} = \begin{bmatrix} \text{CONST: ACT-ON } (x, y) \end{bmatrix} \\ \text{NTS} = \begin{bmatrix} \text{TELIC: BECOME } (y, [\text{BE } (z)]) \end{bmatrix} \end{bmatrix} \end{bmatrix}$$

一方，(22) にあるように「仏像」のようなタイプの名詞句を項にとる場合は「木」のようなタイプの名詞句を項にとる場合と意味構造が異なる。時間をあらわす副詞表現でも (28) と異なり，(30) では容認度が反対になる。また，(31) のような right-node raising 文から，この 2 つの「彫る」が別の動詞であることを示している。よって，この「彫る」は creation であり「彫る $_c$」とし (32) のとおりの意味構造の仮定となる。TS の結果状態（彫られたものの存在）を含むのが特徴である。

(30) a. 1 時間で仏像を彫った。
b. ?1 時間（の間）仏像を彫った。

(31) ??ケンは木を [　]，タケシは仏像を彫った。

(32) $$\begin{bmatrix} \text{彫る}_c \\ \text{ARG} = \begin{bmatrix} \text{ARG1: } x, \text{ ARG2: } z, \text{ D-ARG1: } y \end{bmatrix} \\ \text{QUALIA} = \begin{bmatrix} \text{TS} = \begin{bmatrix} \text{CONST: CAUSE } ([\text{ACT-ON } (x, y)]), \text{ BECOME } (y, [\text{BE } (z)]) \end{bmatrix} \end{bmatrix} \end{bmatrix}$$

(8) は (32)，(9) は (29) に対応しており，Basilico (1998) の考える概念構造では明示的に表現されていない点を明示化している。

CR と解釈できる (21) の「木を彫った」は，(29）より，(33) のような意味構造となる。内項の「木」は BE の要素にはならず動詞の直接目的語となり，変化後の要素 (z) は未定のままである。つまり，目的語の「木」という個体が命

題レベルに表示されることで「木」の存在が前提されるが，前提となる「木」についての叙述は語彙レベルで NTS の部分で含意されるだけであり，categorical judgment となる。

(33) $\begin{bmatrix} \text{木を彫る}_t \\ \text{ARG} = \begin{bmatrix} \text{ARG1: } x, \text{ D-ARG1: } z \end{bmatrix} \\ \text{QUALIA} = \begin{bmatrix} \text{TS} = \begin{bmatrix} \text{CONST: ACT-ON } (x, [\![\text{木}]\!]) \end{bmatrix} \\ \text{NTS} = \begin{bmatrix} \text{TELIC = BECOME } ([\![\text{木}]\!], [\text{BE } (z)]) \end{bmatrix} \end{bmatrix} \end{bmatrix}$

一方，HIRC と解釈できる (22) の「仏像を彫った」は，(32) より，(34) のような意味構造になる。内項の「仏像」は変化後（BE の作用域）の要素の位置 (z) に入る。この名詞句は「仏像」という存在をあらわしているが，「木材」といったような何らかの属性をあらわしているわけではない。統語構造は (6) を基本に考えているが問題点もあり今後の課題である。

(34) $\begin{bmatrix} \text{仏像を彫る}_c \\ \text{ARG} = \begin{bmatrix} \text{ARG1: } x, \text{ D-ARG1: } y \end{bmatrix} \\ \text{QUALIA} = \begin{bmatrix} \text{TS} = \begin{bmatrix} \text{CONST: CAUSE } ([\text{ACT-ON } (x, y)], [\text{BECOME } (y, [\text{BE } ([\![\text{仏像}]\!])])]) \end{bmatrix} \end{bmatrix} \end{bmatrix}$

5　終わりに

本研究は，CR を HIRC と対比させて再考察し，HIRC と明確に区別可能かどうかを動詞句の構造をもとに Thetic and Categorical Judgement を基にした統語構造の考えと生成語彙意味論の枠組みを使っての分析を試みた。CR と HIRC との違いを意味構造から分析し Basilico (1998) の考える LCS よりは明確な表示システムを提案した。提案する意味表示システムから，thetic judgment が関わる HIRC と，categorical judgment が関わる CR とでは関係節内の動詞の項となる名詞句の生起する領域が違うことが明らかになった。

HIRC と CR においては，節内の動詞句の意味構造の違いが統語構造への分析につながり，Basilico (1998) の考える統語構造が基本となると考えられるが，分析過程での問題点が多く今後の課題である。

参考文献

Basilico, D. (1998). Object Position and Predication Forms. *Natural Language & Linguistic Theory*, **16** (3), 541–595.

Hidaka, T. (2011). *Word Formation of Japanese V-V Compounds*. Ph.D. dissertation, Kobe Shoin Women's University.

Hoshi, K. (1995). *Structural and Interpretive Aspects of Head-internal and Head-external Relative Clauses*. Ph.D. dissertation, University of Rochester.

Jackendoff, R. (1990). *Semantic Structures*. The MIT Press, Cambridge.

Kuroda, S.-Y. (1992a). Judgment Forms and Sentence Forms. In Kuroda, S.-Y. (Ed.), *Japanese Syntax and Semantics: Collected Papers*, pp. 13–77. Kluwer Academic Publishers, The Netherlands.

Kuroda, S.-Y. (1992b). Pivot-Independent Relativization. In Kuroda, S.-Y. (Ed.), *Japanese Syntax and Semantics: Collected Papers*, pp. 114–174. Kluwer Academic Publishers, The Netherlands.

Ladusaw, W. A. (1994). Thetic and categorical, stage and individual, weak and strong. In Harvey, M. & Santelmann, L. (Eds.), *Proceedings from Semantics and Linguistic Theory*, Vol. IV, pp. 220–229.

Larson, R. K. (1988). On the Double Object Construction. *Linguistic Inquiry*, **19** (3), 335–391.

Nishigauchi, T. (2004). Head-Internal Relative Clauses in Japanese and the Interpretation of Indefinite NPs. *Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin (TALKS)*, **7**, 113–130.

Pustejovsky, J. (1995). *The Generative Lexicon*. The MIT Press, Cambridge.

Shimoyama, J. (1999). Internally Headed Relative Clauses in Japanese And E-Type Anaphora. *Journal of East Asian Linguistics*, **8** (2), 147–182.

Tonosaki, S. (1998). Change-Relatives in Japanese. *Journal of Japanese Linguistics*, **16**, 143–160.

影山太郎 (2005). 「辞書的知識と語用論的知識–語彙概念構造とクオリア構造の融合にむけて–」. 『レキシコンフォーラム No.1』, pp. 65–101. ひつじ書房, 東京.